

甘樫丘東麓遺跡の調査

— 第141次

1 はじめに

奈良県高市郡明日香村川原にある甘樫丘は飛鳥川の左岸に広がる標高約150m、比高約50mの丘陵である。現在は国営飛鳥歴史公園甘樫丘地区として整備されている。調査地は丘の東麓から北西に向かって入り込む谷地で、約6,000㎡の平坦地が広がる。近年まで果樹園として利用されてきたが、造園修景が計画されたために確認調査をおこなうこととなった。

樹木を避け、幅5mの調査区を「キ」字状に設定したが、既設の遊歩道を残すために十字をつなげる形となった。また、谷の奥に当たる北東部分の状況を確認するために別区画を設けた。調査区の総延長は145m、調査面積は725㎡。調査期間は2005年8月23日～12月9日である。なお、記述の便宜上、北西の十字トレンチを北西区、南西の十字トレンチを南西区、離れたトレンチを北東区と呼ぶ。

2 過去の発掘調査

甘樫丘東麓遺跡では小規模な試掘調査も含めて5回の発掘調査がおこなわれた。とくに1994年の第75 - 2次調査では、7世紀後葉から末にかけて大規模な土地の造成をおこなっていることや、7世紀中頃の焼土層が存在することが判明した（『藤原概報25』）。焼土層からは土器とともに焼けた壁土、炭化木材が出土しており、『日本書紀』に記載のある蘇我蝦夷・入鹿の邸宅との関連が注目された。今回の調査地は、1994年の調査区から見た谷の奥に相当する。

3 基本層序

調査地は谷地形のため、最も標高の高い調査区北西端部と南東端部で約4mの比高差がある。付近は近年まで棚田や果樹園として利用されてきたため、全体に約1m程度の造成がなされている。

この造成土を除去すると、耕作土である灰色砂質土が調査区のほぼ全体に堆積する。さらに下層には茶褐色砂質土、明茶色砂質土、暗褐色砂質土の整地土が堆積し、黄褐色砂質土の地山となる。ただし、北西区の東北部

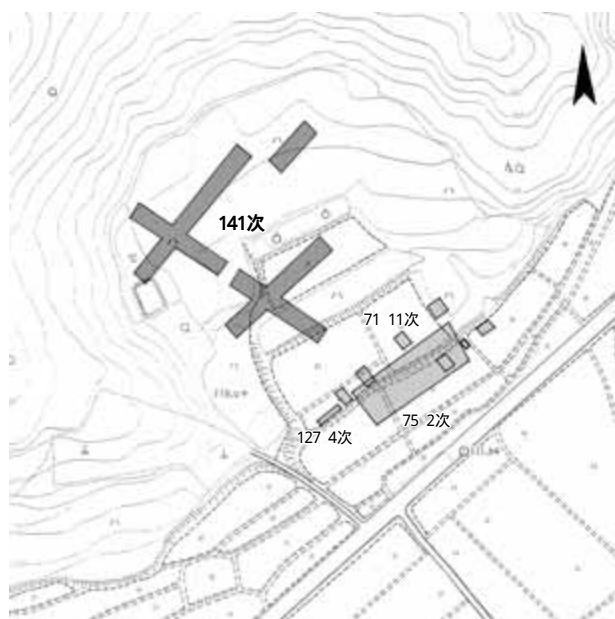


図95 第141次調査位置図 1:2000

分、北東区の西北部分では耕作土を除去した直下で地山を確認した。したがって原地形は平坦ではなく、谷の北西側と北東側から伸びる2本の谷がV字状につながり、南東側に抜けていくと判断される。この谷の部分を中心に整地がおこなわれている。北東区の西南端付近で排水溝を掘り下げたところ、灰褐色と暗褐色の整地土が交互に積み重なっている様子が判明した。また、南東区の東南部分では耕作土の直下で明黄色砂質土の地山に至る。

遺構検出面の標高は北西区の西北端で約119.8m、北東区の東北端で約118.5m、南西区の東南端で約116.0mである。

4 検出遺構

検出した遺構は7世紀の遺構、平安時代～近世の遺構に分けられる。以下、おもな遺構について詳述する。

7世紀の遺構

SB070 北西区の東北部で検出した掘立柱建物。梁行2間、桁行5間で、柱間は梁行が6尺、桁行が7尺。建物の全体は検出していない。建物の東北半部は地山上で、西南半部は整地土上で検出した。建物の軸線は北で西に約35°振れる。

SD066 SB070の南西側で検出した溝。後述する掘立柱建物SB065の柱穴によって壊されている。溝の底面の一部が焼けて硬化し、その位置から飛鳥期の土師器高坏が伏せられた状態で出土した。

SD067 SB070の北東側で検出した溝。溝の北西側は削平されている。埋土からは飛鳥期の土器とともに焼

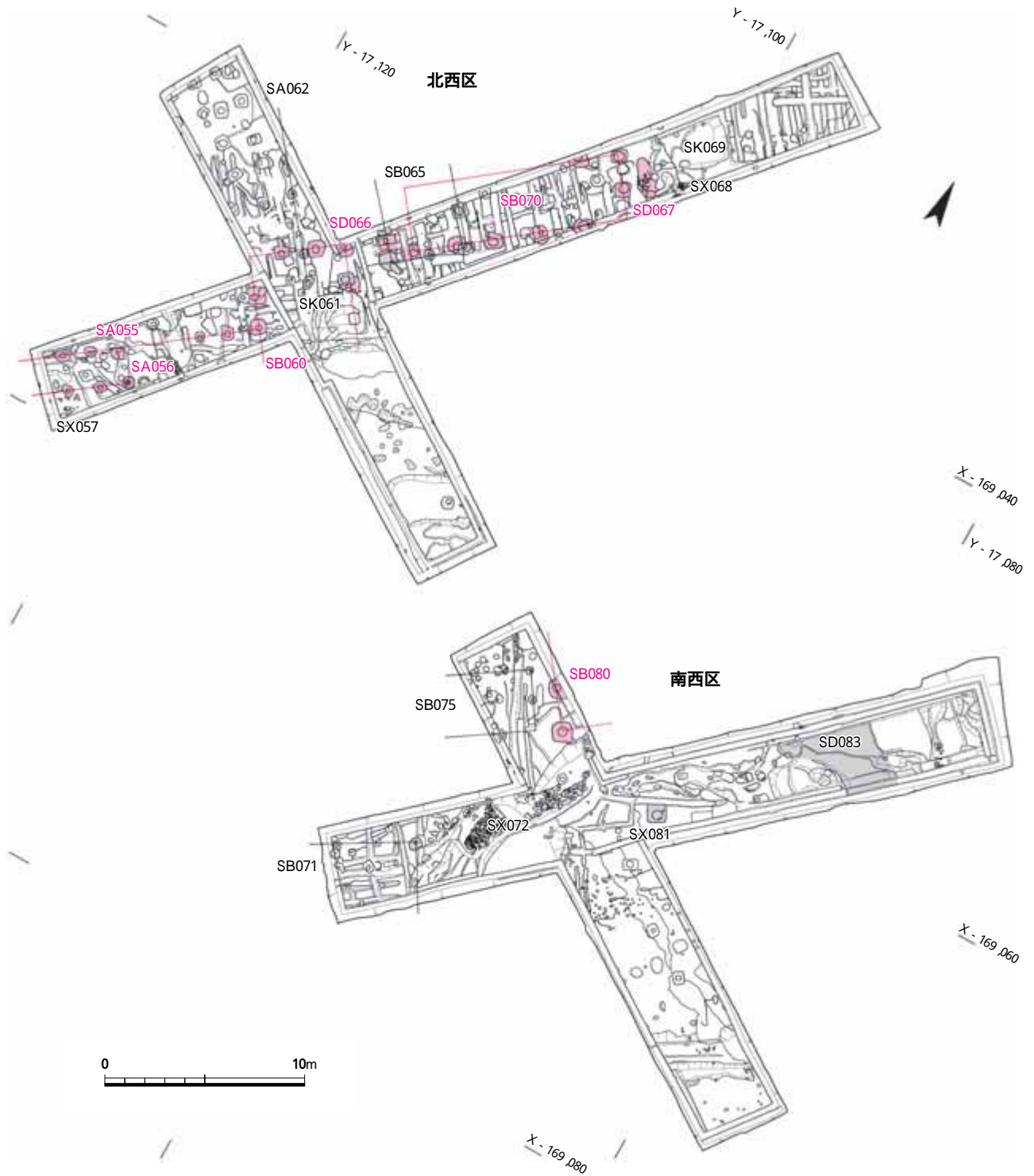


図96 第141次調査遺構図（北西区・南西区） 1:300

土、炭、壁土を検出した。

SD066とSD067はSB070と平行し、同時期の遺構である可能性があるが、いずれも調査区外へ続くため、現段階では確定できない。

SB060 北西区の中央付近で検出した掘立柱建物。桁行3間、梁行2間以上。柱間は6尺等間。建物の東南部分は土坑SK061によって壊されている。SB070と同様、建物の東北部分を整地土上で検出した。建物は南東の調査

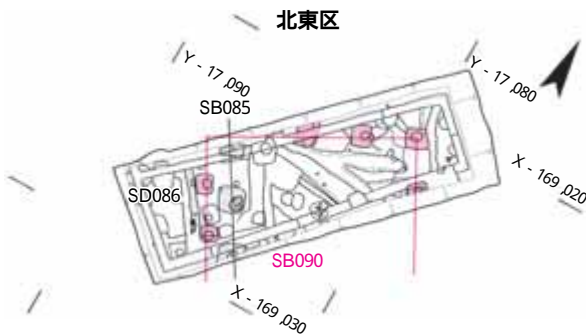


図97 第141次調査遺構図(北東区) 1:300

区外へと続く可能性が高い。軸線は北で西に約35°振れている。

SA055 SB060の南西側で検出した掘立柱塼。4間分を確認したが、一部を2本の溝によって破壊されているため、本来は8間以上あったと考えられる。柱間は5尺。SB060の妻柱列と直交することから、SB060の南西に敷設された塼と考えられる。

SA056 SA055の南側で検出した掘立柱塼。2間分を検出し、さらに南西に延びる。柱間は6尺。北東寄りの柱穴抜取埋土から須恵器杯蓋が1点出土した。SA055とほぼ併行することから、両者が一体となってSB060に取り付く回廊上の遺構となる可能性もあるが、柱間が異なる。いっぽう、梁行2間の掘立柱建物の妻柱列である可能性もあるが、調査区内のみでは確定できない。

SX057 SA056付近で検出した礫敷。暗褐色の整地土上で検出した。拳よりやや小さい礫をまばらに敷く。SA056の柱穴と重複関係はなく、調査区外に広がるため、時期や性格は不明。

SX068 SB070の東側で部分的に検出した配石遺構。直径70cm程度の円形を呈し、挿鉢状に窪ませた盛土の上に拳大の礫を貼り付ける。外側には環状に溝が廻る。最深部分が調査区外に延びるため、性格は不明。

SK069 北西区の東北部で検出した土坑。幅約3mの範囲を検出し、調査区北西へと続く。埋土からは飛鳥～期の土器が多量に出土した。

SB065 北西区の中央付近で検出した掘立柱建物。梁行2間、調査区の北西に続くため桁行は不明。柱間は6尺等間である。柱穴は一辺約90cmの正方形だが、妻中央の柱のみ一辺約50cmとやや小さい。軸線は北で西に約40°振れる。柱穴の重複関係から、SB070およびSD066よりも新しいことがわかる。

SA062 SB060と重複する位置で検出した掘立柱塼。柱間は5尺。柱穴は一辺約40cmの正方形で、他の柱穴に比べて小規模である。SB060の柱穴と直接の重複関係はなく、先後関係は不明。

SB080 南西区の中央付近で検出した掘立柱建物。一辺約1mの柱穴2基が並ぶ。柱間は8尺。掘立柱建物の西南隅部と推定される。北東方向の延長線上では柱穴が検出できず、検出面の標高も低くなることから、削平された可能性が高い。

SX081 SB080の南で検出した大型の柱穴。掘立柱建物の一部の可能性が高い。柱穴を壊す耕作溝の底面で深さを確認したところ、柱穴の底まで約10cm分しか残存していない。

SB090 北東区で検出した梁行3間以上、桁行4間の掘立柱建物。建物の全体を検出していない。柱間は7尺等間。東北端とその南の掘形は地山面、その他は整地土上で検出した。軸線は北で西へ約30°振れる。

SB085 北東区で検出した掘立柱建物。一辺約1mの柱穴3基が南北方向に並ぶ。軸線は北で西へ約30°振れる。SB085とSB090は重複する位置にあるため、少なくとも2時期にわたる建物の変遷が考えられるが、柱穴自体の重複はなく、先後関係はわからない。

SD086 SB090の南西側で検出した溝。埋土は灰褐色の粗砂。SB085と方位を揃える。埋土から藤原宮期の土師器が出土した。

SD083 南西区の南東端付近、黄褐色の整地土上で検出した溝。幅約5m分を検出し、南へ続く。排水溝部分で深くまで掘り下げたが、湧水が激しく、溝の底面まで掘り下げられなかった。埋土は青灰色の粘土と灰褐色の砂が互層をなして水分を多く含み、しまりが悪い。土石流や自然流路の可能性もある。出土遺物はなく、時期を確定できない。

平安時代～近世の遺構

SB075 南西区の西北部で検出した掘立柱建物。SB080の柱穴を覆う暗褐色土上で検出した。梁行2間、桁行3間以上、柱間は5尺。

SB071 南西区の西南部で検出した掘立柱建物。梁行、桁行とも2間以上。柱間7尺。柱穴は平安時代初頭頃の土器を含む溝を壊している。また、SB071とSB075の柱穴は埋土が暗褐色の砂質土で、他の遺構との違いが比較的

明瞭であった。

SK061 北西区の中央付近で検出した隅丸方形の土坑。長辺約2.8m。土坑の西北辺には径20cmほどの小規模な柱穴が並ぶ。土坑と柱穴の埋土は耕作土と同じ灰褐色の砂質土で、近世以降、この場所が棚田として利用された際の貯水施設と考えられる。柱穴はその護岸の柵跡の可能性もある。

なお、SK061を挟んで北西側と南東側では約1mの段差が生じている。南東側では遺構が極めて希薄になるので、後世の棚田の造成等によって大きく削平されていると考えられる。

SX072 南西区の中央付近で検出した石組遺構。整地土を削平した斜面に人頭大の石を貼り付けるようにして並べるが、あまり堅固に組まれていないため、転落した石も多く認められる。重複関係から、耕作溝よりも新しい。石の隙間からは近世の染付茶碗が出土した。棚田の護岸施設と推定される。

5 出土遺物

土器 遺構および遺物包含層から整理箱50個分の土器が出土した。土器の年代は7世紀全般にわたる。円面硯や漆付着須恵器小壺も少量出土した。(豊島直博) 瓦磚類 調査面積に比較すると多量といえる瓦が出土した。内訳は、丸瓦241点(26.48kg)、平瓦784点(65.16kg)である。軒丸瓦は、川原寺の601型式C種と同範のものが2点、近世の巴紋軒丸瓦が1点出土した。丸瓦・平瓦の9割以上は古代から平安時代にかけてのもので、多くは川原寺から出土する瓦と同じものである。ただし、瓦の年代に幅があること、関連する遺構が確認されていないことなどから、調査区周辺における瓦葺建物の存在は想定し難い。(寛和也)

その他の遺物 円筒埴輪の破片が少量、鉄釘、鉄庖丁、砥石、榛原石などが遺物包含層から出土した。木製品と木簡は出土していない。

6 まとめ

調査の成果 今回の調査の最大の成果は、谷の広い範囲で大規模な整地がおこなわれている様子が判明したことと、7世紀の掘立柱建物6棟と堀3列を確認したことである。甘樫丘東麓で建物を確認したのは、今回の調査が

初めてである。谷の奥の平坦地に建物群が存在することが明らかになったために、1994年の調査で確認した整地層や焼土層とあわせて遺跡の性格を考える必要性が生じた。

建物群の年代 まず建物群の年代について考えたい。北西区のSB070とSB065は柱穴に重複関係があり、SB065のほうが新しい。また、北東区のSB085とSB090も重複する位置にあるので、建物群には少なくとも2時期の変遷があることがわかる。

北西区の整地土からは7世紀前半の土器が出土し、谷の造成がおこなわれた時期を推定する手がかりが得られた。建物群の一部はこの整地土上に建てられている。柱穴から出土した土器は少なく、正確な時期は特定できないが、調査区全体から出土した土器の様相から、7世紀代に属すると判断した。

なお、SB070の両妻柱列の外側では、埋土に飛鳥期の土器を含む溝SD066とSD067を検出している。この溝がSB070に関連する遺構であるならば、建物の年代を推定する手がかりとなるが、今回の調査範囲内では確定できない。

いっぽう第75-2次調査では、7世紀中葉の土器を含む焼土層は地山の直上で確認され、7世紀後葉の整地層に覆われていた。整地層は前後2時期にわたり、その間に土石流の埋没層SX036がある。今回の調査の南東区で確認した溝SD083がSX036と一連であった場合には、南東区で確認した整地層や、その上面で確認したSB080の所属時期も7世紀後葉以後となる。

建物群の性格 7世紀の大規模な整地の様相は、第75-2次調査で確認した焼土層とともに、この場所が『日本書紀』に記載のある蘇我氏邸宅の候補地のひとつであることを示している。

7世紀の居館遺構としては、奈良県桜井市上之宮遺跡の例が挙げられる(清水真一『阿部丘陵遺跡群』桜井市教育委員会、1989年)。上之宮遺跡では、回廊状遺構、園池遺構とともに四面庇付大型建物が確認されている。今回の調査では大型建物は未確認である。また、先述したように建物の年代が7世紀後半に下る可能性もある。蘇我氏邸宅との関連性については、今後の調査で建物群の年代と配置、大型建物の有無などを明らかにした上で判断すべきであろう。(豊島)